

## アフガン戦災孤児救済事業に協力をお願い

2010年5月5日



## アフガン・ヤティーム救済事業計画

シンポジウム（7月末予定）  
講演会（神戸、高知、高松、大阪予定）  
活動資金募金（9月開始予定）

都内でストレス・セラピーを営む生井隆明さんは2002年から6年間、カブールで戦災孤児（ヤティーム）救済を続けましたが、情勢が悪化し撤退を余儀なくされました。頭部に弾丸が残ったままの少女ファチマちゃんが日本で摘出手術を受けたというニュースを覚えていますか。その少女を奇跡的に発見して日本に連れてきたのが生井さんでした。

来年、アメリカはアフガニスタンから撤退する方針です。経済支援は再開するでしょうが、各国の支援は子どもたちの心の問題にまで及ばない。もう一度、アフガンの子どもたちのために尽くしたい。生井さんの思いです。

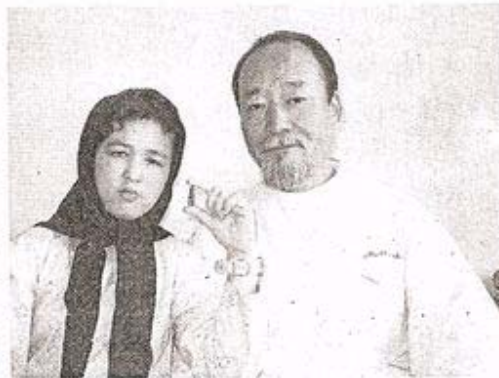
わたしたちは生井さんのアフガンでの活動再開にあたって全面的に協力することを決めました。財団創設者の賀川豊彦が没後、低迷していた活動にもう一度命を吹き込みたいという思いがありました。2009年の賀川豊彦献身100年記念事業の取り組みの中で生井さんとの出会いがありました。生井さんの活動をバックアップすることは、まさに賀川の遺志を引き継ぐことになると決断しました。

財団では今後、シンポジウムや各地での講演会を開催します。生井さんの活動を支援する基金も立ち上げる方針です。ぜひみなさまのお力をお貸し下さい。お願い申し上げます。

نجات دهد و یا این عمل ثابت کند که انسجام و نوع دوستی و رحمت و مروت و جوانمردی مرز ندارد و در دایره تنگ مرزهای جغرافیایی نمی گنجد و می توان دست نوازش بر سر کودک بیسی در هر جای دنیا کشید و به او محبت کرد. مردم جاپان نیز با کمک های خویش کمک کردند که مهرسانی و انسان دوستی هنوز هم از اصول اولیه زندگی آنهاست. بعد از اینکه فاطمه نجات یافت و عطیاتی بسا موفقیتهایی سری شدند صدر اعظم جاپان در شفاخانه به ملاقات او آمد و اکلیل گل به او تقدیم کرد و کمره های جاپان توماس و احترام او به یک دختر بیسم افغانی را به مردم جاپان نمایش دادند.



اکون فاطمه به آغوش خانواده اش برگشته است و زندگی بدون درد و رنج را تجربه می کند و در کنار ماوش به مکتب، کتاب، فیلم، معلمان و هم سنایی هایش فکر می کند. مادر فاطمه از دانشکده تربیتی نمی "و کلیتیک کمک به بیم های جنگ زود آسپا و اعضای آن و به خصوص از آقای سنی لائش که حدود دو سال برای ندای فاطمه فعالیت کرده اند همیشه تشکر می کند.



یول کم لذا از مردم انسان دوست جاپان کمک خواستند و آنها نیز صدقاته کمک کردند. فغانستان زندگی فاطمه در یکی از روزنامه های بزرگ جاپان به چاپ می زند و آنها از مردم جاپان تقاضای کمک می کنند و نمایشی شان نیز بدون پاسخ نمی ماند و هزینه بالای ندای فاطمه از مردم جاپان جمع آوری و پرداخت می گردد. داکتران تصمیم می گیرند چهار بیمار بسوی روی فاطمه عملیات انجام دهند، هر می را از مغز او بیرون می کنند و دماغ و دندان های او را درمان می کنند و بعد از اطمینان به او استراحت می دهند. ساعت ها تلاش مرادفلسفه داکتران جاپانی جان فاطمه را از خطر مرگ هستی نجات می دهد و او دوباره به زندگی بر می گردد. داکتر سنی "ماهاها تلاش کرد تا جان فاطمه را

# فاطمه به مکتب می رود

گزارش از خودها

چند هفته پیش برای بزرگه و مصاحبه با دختر خردسالی به میدان هوایی کابل رفته بودم که بنا بر من در مغز خویش همراهِ بسا مادرش و داکتر پیر جاپانی به سوی سرزمین جاپان رهسپار بود. دختر که با چشمهای اشک آلوده به این سوال من که آیا دوست داری به افغانستان برگردی پاسخ مثبت داد و در جواب اینکه پسند از آن چه خواهی کرد گفت: به مکتب می روم. اکنون او چند روزی است که به افغانستان بازگشته است، به همان سرزمینی که سالهای جنگ های خانمانسوزش درد و رنج و آزار او کرده بود.

فاطمه بسا تلاش می کند و خوشگلی ناپذیر کلیتیک کمک به بیم های جنگ زده آسیا که مرکزش در دهسوری کابل است و داکتر "ترومی نی" و مردم و داکتران جاپانی از زندگی پر محبت و درد سابق خویش رها شده است و اکنون به جای لشک های پناهنده از درد و غمب مانده گی لبخند ملیح زندگی بر لبان او نقش بسته است. آرزوی

2004年9月、アフガンの新聞に掲載されたファチマちゃんとお生井隆明さん

6年間アフガンで戦災孤児救済  
ヤティームの父となった生井さん

2010年4月21日 萬晩報記事  
<http://www.yorozubp.com/>

生井隆明さんは、独学で精神医学やストレス医学を学び、東京都文京区でストレス・セラピーを営んできました。阪神淡路大震災や台湾大震災では被災者のストレス障害ケアに努めました。

アフガンとの出会いは2001年10月、アメリカによるアフガニスタン空爆でした。いても立ってもいられなくなり、翌月にはパキスタンの難民キャンプに足を運びました。目の当たりにしたのは、親を空爆でなくした子どもたちの悲惨な姿でした。普通に親をなくすだけでも大変なストレスとなります。そこにいた子どもたちは目の前で親を殺された子どもたちでした。生井さんは2002年4月、NPO（アジア戦災孤児救済センター＝AWOA）を立ち上げ、5月にはカブールでストレス・クリニックを開設しました。

「無謀といえば無謀です。イスラマバードから一席空いていたチャーター機に乗り込んだのです。運よく臨時政府のNPO長官と接触がとれて人づてにスタッフを増やしていきました。親を失った子どもたちは群れをつくってカブールを目指していました。アフガンで孤児のことをヤティームといいます。そのヤティームたちは田舎では食べられないので何百キロも歩いてくるのです。最初、街角ごとにプラカードを立てて目につくようにしました。カブールにやってきた孤児たちをわれわれのクリニックに来てもらうためでした。いい女医さんの協力を得ることができました。すぐに私がパダル（お父さん）とよばれ、彼女がマダル（お母さん）と呼ばれるようになりました。親代わりがまず必要だったのです。ヤティームたちは精神的にも肉体的にも大変なストレスの固まりなのですが、抱き締めてあげることが一番重要なことなのです。そしてぬくもりも必要です。クリニックでお世話をしたのは5000人ですが、往診も含めると3万5000人ぐらいになりましょうか」

「私の仕事はヤティームたちのストレスを取り除

くことですが、自立の道も模索しました。農場をつくり、鶏を飼いました。卵を売れば現金収入になります。卵を産まなくなれば鶏は高値で売れます。職業訓練を兼ねた事業です。カブール大学の医学部と接触して、学生たちにストレス・セラピーを覚えさせるプログラムも提供しました。これは大ヒットでした。現地の日本大使館から2-3億円の申し出があったことが、大学側を刺激したのです」

「問題は命の危険でした。外出時にはいつもガードマンに付き添ってもらっていました。寝る時には枕元にカラシニコフがありました。片時も心が休まらないのです。治安は日に日に悪化して、大統領府から撤退要請がありました。街のモスクの長老たちが守ってやるというので1年間がんばりましたが、2007年に現地スタッフに事業を委ねる決断をしました。しかし私の後任者はその1年後にマザリシャリフで爆殺され、事業すべてを断念することになりました。無念でしたが、私自身の精神状態も限界にきていたのです」

「お金ですか？ 5000万円ほど使いました。私と家内の蓄えと支援者からの借金です。さっき話した外務省からの申し出は使っていません」

生井さんはアメリカ撤退後のアフガニスタンの子どもたちのことを心配しています。国連にも戦災孤児を救済するプログラムはないそうです。2年前まで続けた事業を再開したいというのが、生井さんの強い意思です。

生井さんを突き動かすものは何なのでしょう。孤児たちは強いストレスに悩まされるだけではありません。戦場で子どもたちは誘拐の対象でもあります。さらわれて兵士に育てられるケースはカンボジアでもアフリカでもありふれた光景でした。これをアフガンで繰り返させたくないのです。

賀川豊彦は生前、「日本にスラムがなくなったらどうするのか」という質問にこう答えていたそうだ。

「そうになったら中国の子どもたちを救い、アジアの子どもたちを救いたい」と。

財団法人国際平和協会 1946年、戦争防止と核兵器廃絶を目指して賀川豊彦らによって設立。後に世界連邦運動に参画。1952年、広島市に世界連邦運動アジア大会を誘致、戦後のアジア・アフリカの独立気運を促す。世界連邦日本国会委員会、世界連邦宣言自治体全国協議会は現在も続く。

〒107-0051 東京都港区元赤坂 1-1-7-1103 電話 03-3470-5013 <http://www.jaip.org>

会長 伴 武澄 (090-3599-0286)、[ugg20017@nifty.com](mailto:ugg20017@nifty.com)

事務局担当 赤池洋二 (090-5405-3019)、[gate\\_gate01@jcom.home.ne.jp](mailto:gate_gate01@jcom.home.ne.jp)